

囚われの姫君

1

イオロープの地は荒廢の地だ。ウーリヤンの山々を越えて西の彼方に広がるその地はかつて世界をおおった大いなる悲劇によって大層な痛手をうけ、長い年月が過ぎた今日でも、その傷が土地とそこに住む人々から消える事がないのだという。

イオロープと一口にいつてもそれは相当に広い地を指しており、北には雪におおわれたナールヴェーンやゼーデン、南には豊かな果実がみのるタラエリーなど様々な国があるのだが、いったいに人の数は少なく、痩せた土地を耕し、あるいは獣を追って―イオロープにはほかの土地では御目にかかれぬ、あきらかに異常な姿をした獣が見受けられた―細々と暮らしていた。

人々は迷信深く、部族ごとに様々な神々を崇めていた。ただひとつジュザースという神はどこに行つてもその名を耳にする事が出来たが、それは忌み嫌われる不吉の神の名なのだ。

私は世界を放浪する当て所ない旅の途中で、この地に入り込んだ。数カ月の旅の後、鋼の街ダーチェンを後にして、パアリシユと呼ばれる街―より正確には街の跡だろうか―にたどりついていく。

既に故郷のサンジェリイの街を旅立ってから、かなり長い月日が過ぎており、私の心には旅の途中で出会った幾つもの事件によってある種の淀み、澱、といったものが溜まってきていた。世界にはおぞましい物事が多すぎる。何故か、人々は暗黒の申し子どもと関わりを持ちたがるのか。本当に醜いのは何者なのか。

ここはそういつた憂鬱を抱えた私にはまさにうつつつけの風景を提示してくれた。

パアリシユは廢虚の街だった。

そこにあるのは灰色と赤茶色の石とも金属とも見極めかねる固まりだった。どろどろに溶けた何物かが再度固まったかのような、ねじれた不安形の固まりが到るところに林立して、灰青色の空に向かつていた。その不可解な彫刻とも見える物は大きな家程の大きさの物から、人程の物まで何百、何千とあり、私を奇怪な異形のもの墓場に來たような気分させた。

誰も住むものはない廢都だと私は聞いていたが、無銘の墓標の中を馬で行く内、人のざわめきのような物音が聞こえてくることに私は気づいた。それもひとり二人の物音ではない。大勢の人間がこの街のどこかにいるようだった。

こんな死の街で大勢の人が一体何をするとしようか。私は音のする方角をめざして、馬を進めた。

冷たい風に乗ったその音は街の中央辺りにそびえる塔の方から聞こえてくるようだった。塔は高く街の外からでもよく見えた。高さ三百メートル（約百メートル）もあるうか、街に建つ灰色と茶色の固まりと同じような物で出来ているらしく、錆びた鉄のような色合いだった。実際、大きな鉄か何かの柱を何百本も組み合わせて、そこに石の板を取り付けていつたふうにも見えるが、きちんとした形という物はなく、全体の輪郭は大雑把に削られた巨大な石の柱といった感じだった。

塔に近付くにつれ、ざわめきは大きくなっていき、塔の周囲に多くの人間がいるのもう確かなことのようにだった。

やがて、建ち並ぶ物がふつとなくなり、視界が開けた。塔の周りには直径数百メートルの大きな空き地になっておりそこに一隊の軍勢が野営をはつていた。

幾つもの白い天幕に青と紫に染め分けた三角旗を立て、数百人の兵士たちが鎧兜に身を固めていたのである。

私は好奇心に引かれるままに軍勢に近づいていつた。兵士たちは各々の武器を磨いたり、馬の世話をしている者もいたが、草原に寝そべっている者や、カードで賭けごとにいそしんでいる者も見受け

られた。戦を前にしてのしばしの休息といった所なのだろうか。

彼らの甲冑はきらきらと光る銀色に磨き上げられ、青と紫の羽飾りを幾つもつけた派手な物だったが、中には備兵らしい、黒ずんだ傷だらけの鎧姿の者もいるようだった。

私がひとつの天幕の方へ行こうとすると、近くに立っていたひとりの兵士が声をかけてきた。

「おい、おまえ、とまれ、とまるんだ」

「僕のことですか」

「ぼ・く？何を珍妙なことをいつてる。おまえは宮廷詩人か何かのつもりか」

まだ若い髭面の背の低い男だった。黒と赤の鎧は彼には少々大きすぎるように見える。眉間にしわを寄せた顔は余りこわもてのするものではなかったが、目付きは鋭いものがあった。

「詩はあまり得意じゃなかった。ドニエル先生にはおまえは散文的人間だといつも言われてたね」

兵士はうさんくさげに髭をなでた。

「学のあるのはわかったが、何しにここに来た。答えろ」

「何でもない、物見遊山の旅人さ」

「こんなところに物見に来る奴はいない。いるとしたら頭のおかしな詩人ぐらいだ。もう少し学のあるところを見せろ」

男は広刃の剣を抜いた。

「詩人に恨みでもあるのか。自分の理解出来ないものをけぎらいするのは学のない証拠だ」

「なんだと」

剣が振りかぶられ、繰り出された。私は手綱を引いたが、剣先が馬の脇腹をかすめ、馬は竿立ちとなった。

私は振り落とされた。兵士の剣が振り下ろされてくる。地べたを転がって切っ先をよける。足をのばして、男の足首を引っ掛けた。

奴がよるける合間に私は立ち上がって、剣を抜いた。「物見遊山だといつてるだろう」

「そんな台詞を信用する程馬鹿じゃない。ヌーヴァールの手の者だろう、きさま」

兵士の一撃が襲ってきた。右へとんでよけ、奴の左肩に斬りつける。広刃の剣が私の剣をはねつける。背は低いが臂力はあるようだ。

我々は互いに有効な一撃を与えようと斬り結んだが、かすり傷を互いに幾つか負わせただけでなかなか決着を付けることが出来なかった。そのうちに騒ぎを聞きつけた周りの兵士たちが集まり出した。加勢するかと思つたが、彼らは我々の周りを取り囲み口々にはやし立てた。

「行け！ユイス、そこだ」

この男の名はユイスというらしい。

火花が散って、私とユイスの剣が組み合った。奴の方が力はある。私はじりじりと押し戻された。何人もの血が染み着いているであろう、少々刃こぼれのした刃が迫ってくる。

「くたばれ」

ユイスが口から唾をとばした。

「やめろ、やめないか二人とも」

太い声がして、鞭が飛んできた。背中に焼けるような痛みがはしって、私はひっくり返った。ユイスもすぐそこで肩を押えている。

黒い馬に乗った騎士が立っていた。ぴかぴかに磨かれた銀の鎧に身を包み、兜にはやたらといっぱい羽飾りを付けている。位の高い奴のようだった。

「これは何事だ、その備兵、説明してみよ」

ユイスが答えた。

「この男が天幕の周りをうろろろしていましたので、誰何したところ、物見遊山などと怪しげなことを言いますもので……ヌーヴァールの手の者かと」

「ふむ、確かに怪しげな風体の者だ。異国人のようだな。塔の魔道

師の使いか、きさま」

「さっぱり話がわからない。僕は遙か大洋の向こうのサンジェリイという街から来たスナブ・ランケンというものだ。パリシユに来るのは初めてだし、塔のことも知らない」

羽飾りの騎士は鞭の柄を握り直した。

「サンジェリイ？そんな街のことは聞いたことがないぞ。地図でも見たことがない。きさま、やはり怪しげな奴だ……」

「ピールエ、私は知っているぞ、その名の街を。父君の本で読んだことがある。西の地の遙か彼方、大いなる海を越えたさらなる彼方にそういう名の街があり、たいそう栄えていると書かれていた」

「はっ、殿下」

集まっていた兵士たちがさつと左右に退き、真つ白い馬に乗った男が現われた。やはり銀の鎧姿だったが、鞭の男のそれに比べて、はるかに優美で繊細な細工が施されており、実戦に使うよりは城の壁龕に飾っておいたほうがよいような代物だった。胸甲には翼を広げた優美な鳥の姿が打ちだされ、そこここに宝石がきらめいていた。両頬を上げた兜の中の顔は少年といてもいい若さだった。青白く繊細な感じのする美しい整った顔だ。水色の瞳はどこか物憂げに曇っている。

「ピールエ、その男の話が聞きたい」

「はっ、しかし、殿下、この男は素性の知れぬ怪しい奴でして……」

「ピールエ、その男がヌーヴァールの手の者であればもう少しましな別の手口を使い我らを謀るであろう。こやつは我らを謀っているように見えぬ」

「ははっ」

美青年は抑揚の少ない感情を隠した声で私を放すように命じた。

私は天幕のひとつへ連れていかれた。一番大きな天幕というわけではないが一番豪華な物であるのは間違いない。深い紫の絨毯が敷かれた中は、どれもこまやかな名匠の技で造られた芸術品といえる

調度がいろいろ置かれていた。

その奥の一段高い所に熊でも座れそうな銀と金をちりばめた椅子が置かれ、“殿下”が座った。

小柄な彼はその椅子に抱かれているように見えた。

「名は何といったかな」

白絹を纏った少年が、葡萄酒らしい赤いものがはいった酒杯を銀の盆にのせ、はこんで来た。

「スナブ・ランケンと申します」

「スナブ：ランケンか。響きが面白い。おまえの祖先はダーチエンあたりの出ではないか」

「さあ、イオロープの人間の血がはいっているという話は聞いたことがありません。三代前くらいにアニヤチかどつかの血がはいつてるとは聞かされたことがありますか……」

「そうか。スナブ・ランケン、私はヴォナブ・アロン、フラートン王国の第八王子だ」

フラートン王国はパリシユから南部のかなりの土地を支配している国だった。その王子様がこの廃都で何をしているのだろうか。

「スナブ・ランケン、遠い異国の男よ、さあ、フラートン自慢の酒を試すがよい。神の恵みで我が国の土は実りが豊かなのだ」

酒は酔っぱく、サンジェリイの酒場では安酒といわれそうな物だった。癖のある苦みも舌に残った。

「さあ、スナブ・ランケン、おまえのやってきた街の話をしてくれ、サンジェリイの街の話を。人々はどんな暮らしをしている？」

私はサンジェリイが交易によつて富を得て栄えていること、ここ数十年、戦はなく、一応の平和が続いていること。民議会があり、王と権力を分かち合っていること、ラグラン大通りの賑やかなさま、ロキオネンス大祭の大騒ぎ、共存する幾多の神々と宗教のことなどを話した。

王子は時折うなずき、短い質問をはさんだが、ほとんどのときは天幕の向こうを見通すような目付きで私の話に聞きいつていた。心

は肉体を抜け出てサンジェリイの街をさまざつていっているかのようだった。私もまたどこか夢見ているような心地になり、知らず知らずのうちに言葉が滑らかに口から出ていった。どうもこの酒には何か特別の効用があるらしい。

「殿下、殿下はこのような土地で一体何をしておられるのですか。

この軍勢は一体何のため、御見受けしたところあの奇怪な塔を取り囲んで攻めようとしておられるようですが、あの塔には何かがあるのでしょうか」

ヴォナプ・アロンは小姓から二杯目の酒を受け取るとひと口飲んだ。視線が天幕の中に戻り、私の顔を見た。

「おまえは物見遊山で世界を旅しているといったな。そのような奇特な男なら私の話も理解し得ることだろう。スナブ・ランケン、私は囚われの姫を救いだすつもりなのだ」

そう言った王子の声にはまさしく夢見るものの響きがあった。私はこの若い王子が政に携わる姿を思い描くことが出来なかった。

「あの塔には何処ぞの姫君が閉じ込められているのですか」

「名はイマーニュ姫という。私と姫は数奇な運命の糸で結ばれている。姫はあの塔にすむ邪悪な魔道師ヌーヴァールによって捕えられているのだ。私と姫とはアビュリエの定めた二人なのであり、ヘヴァンの天界に至るまで分かち難い仲なのだ、ヌーヴァールは私からイマーニュ姫を奪った。彼もまた姫の天上人のような美しさと魂の気高さに心を奪われてしまったのだ」

「それはさぞかし姫の身の上がご心配でしょう」

「ヌーヴァールはイオロップでも指折りの力を持った魔道師だと聞いている。人の心を自由にあやつるくらいは術は奴にとつては指をはじくだけの問題だともな。だが私は信じている。如何な邪悪な力に満ちた魔術であろうともイマーニュ姫の心を私から引き離すことは出来ぬ。妖術使いが怪しの技を使えば使うほど姫の心は私と堅く結びついていくのだ。それがアビュリエの白い羽根に愛でられた愛の力というものだ」

若き王子は青白い頬を幾分紅潮させ、声音もかんだかい物となっていた。

「殿下、この私を殿下の軍勢に加えていただけはしませんか、今のお話しを聞き、ぜひ、私も魔道師を打ち、姫君をとり戻すのに力を添えたくなってきました」

「おお、スナブ・ランケン、おまえも我が軍に加わってくれませんか。おまえの異国の知恵が役に立つこともきつとあることであろう。そうか、私と戦ってくれるのか。そうか、そうか」

ヴォナプ・アロンは本当に嬉しそうに、美しい顔を崩した。その笑みは余りに無邪気とも思えた。

2

簡単な手続きをして、宣誓書に母印を押し、私はヴォナプ・アロンの軍に傭兵としてはいった。この若い風変わりな王子が何をしようとしているのかこの目で見届けたかったのだ。

本人の話によれば囚われの婚約者を助け出すということだが、どうも私には王子の話の額面通りに受け取ることが出来なかった。ヴォナプ・アロンが嘘をついてるとは思われないが余りに彼の話は宙に浮いたような感があった。

私は教えられた自分の天幕の方へ歩いて行つた。そろそろ陽が暮れようとしていたが兵士たちは相変らず武具をみがいたり、つまらない艶話をしていたり様々だったが、その裏にはやはり戦の前の緊張のようなものが見えるような気がした。

私の天幕は一隊のはずれの方の傭兵用の天幕のひとつだった。入り口は開けられており、十人ばかりの男たちが赤兎か何かを煮込んだスープを口にはこんでいた。

「おう、詩人先生のお出ました」

茶化した声をあげたのは先程私と斬り合ったユイスとかいう若い

男だった。

「詩は不得手だと言っただろう、おぼえが悪いな。無罪放免、おまけに僕を雇ってくれた、おまえたちの王子様は脳味噌の使い方を心得ている」

「ははっ、何と、ヌーヴァールめの手先じゃないってことか。それは悪いことをしたな、間諜をつかまえば結構な銭になるかと思つたものでね。まあそこに座つてこのスープを飲み、へ理屈をこねる割にはおまえの腕は確かなもんだつた」

ユイスは髭面に笑みを浮かべて、私にスープのはいつた皿をわたした。

「ありがとうよ。なかなか人間が出来た奴だ」

「ははっ、言いたいことを言う御仁だ」

スープは安物の香辛料をいれすぎたようだったが、まずくはなかった。私は傭兵たちとありきたりの挨拶を交し、サンジェリイからアニヤチを回り、世界を旅していることを話した。大方の兵は大して興味もなさそうに私の話を聞いていたがユイスは目の奥に好奇心を宿らせていた。

「ふうん、それでおまえさん、この軍勢に加わつて何をしようつてんだい、やつぱりお宝かい」

「お宝、何のことだい、そりゃ」

「ははあ、おまえさん、我らが王子様の素敵な物語を聞かされてきたな」

「囚われの姫君を魔道師の手から救い出すという話だったが……あれは真実ではないのか」

傭兵たちの間に小さな笑いが広がった。

「ああ、ほんとのことは誰も知らねえからな、もしかしたらあの胸糞悪い塔の中のどこかに御姫様の骸骨ぐらい転がつてないとは言えないな」

ユイスはぼてつとした唇を歪めて皮肉な笑みを作った。悪い男ではないようだが、この表情は好きになれなかった。

「どういふことだ」

「王子は夢を見ているのさ。あの塔に囚われの姫がいたのは今から二百年も前の話なのさ」

「王子は頭がいかれてるってことか」

「まあ、そういう噂もあるがな」

ユイスは皮袋から赤い酒を銅の杯につき私によこした。舌をさすような酸っぱい味があつたが、王子の天幕で飲んだ物と大した違いはなかつた。

「いろんな話があつて俺もどれが本当のことなのかわかりやしないが、大方の噂をあわせて考えればこんな風になる。フラートン王国の第八王子様は文武両道に秀た御方なのだが、いかんせん、気概という物に欠けておられる。御幼少のみぎりより、お城の図書室の御本に読み耽り、本を友として育ちました。フラートンの王フラートン様は猛々しきでは近隣に聞こえた御方だ。そんな王子をよく見るはずもない。第八王子ということもあるしな。で、お城でもなんとなく疎んじられたヴォナプ・アロン様はますます図書室のかびのはえた御本に入れ込むようになつちました。その拳句がこれさ」

ユイスは頭の上で大きく腕を回して見せた。

「王子はある本に夢中になつちました。このパリシユの街の塔にさる姫君が閉じ込められているという伝説を書いた本だ。二百年ばかり昔、この塔にヌーヴァールという魔道師がすんでいた。ヌーヴァールはあるときパリシユの近くを通りかかったノーム・デリーの姫君イマーニユの美しい姿をみて一目ぼれしちまい、姫をこの塔にさらつて来た。それ以来ヌーヴァールはイマーニユ姫を口説き続けているんだつていうお話しなんだがね」

「それで、二百年後の今も姫が塔にいと王子は信じているわけかい」

「そのようだね。イマーニユ姫にはノーラ・パナツヴという婚約者がいたようで、王子は自分がその生まれ代わりだと信じているらし

いんだな」

「ふうむ。何とも奇妙というか、哀れな話だが、この軍勢は皆王子に同情して集まってるわけかい」

ユイスは鼻をならして笑った。

「まあ、銀鎧のやつらは王子直属の騎士たちだからな。王子に忠誠を誓っている以上、命には逆らえないだろうよ。俺たちは、金目当てだ。あの塔にはヌーヴァールが集めた金銀財宝が山とあるっていうもつばらの話なんぞね」

「ヌーヴァールってのは実在の人物なのか」

「ああ、といっても誰も姿を見た者はいないが、ここらじゃあ、あの塔には怪しげな魔術を使う奴がすんでるっていうのは誰でも知っている話さ。実際、塔に忍びこもうとして、とんでもない目にあつた奴もいるらしいからな」

「化け物でも塔を守ってるのかい」

「さあな、何でも獣にみんな引き裂かれちゃうっていう噂さ、ほんとのところは誰も知らないがな」

私は天幕でのヴォナプ・アロンとの会見を思い起こして、ユイスの話に信をおいた。確かにあの王子には浮き世離れた雰囲気があった。王子の水色の瞳は夢見る者の瞳だった。王子に生まれたことは彼にとって不幸なことだったのかも知れない。

「で、塔への攻撃はいつなんだい」

「明日だ。時刻についてはいま、シャル・マールが水晶球か何かを覗き込んで決めることだろうよ」

「シャル・マール？そいつは何者かね」

その時黒革の鎧の兵士がひとり我々のところにやってきて、大声で命令を伝えた。

「殿下から明日の攻撃についてのお言葉があるそうさ。殿下の天幕の前に集まるように」

「説明がはぶける。シャル・マールが明日のことについてもったい付けた話をするぜ、きつと」

王子の天幕の前にはすでに多くの兵士たちが集まっていた。天幕の前には木で組まれた台座があり青と紫の天鵞絨の布がかけられている。その上に天幕の中で見た物よりは小振りの椅子が置かれていた。

兵士たちはその回りを扇形に囲んでいた。向かって右には銀の鎧の王子直属の騎士と歩兵、左側には多くは黒っぽい鎧の雇われ兵士たちが並んでいる。私たちは一番左側に場所をしめた。

やがてピールエという鞭を持った戦士がこれより王子のお言葉があると告げた。

白金の輝く甲冑姿のヴォナプ・アロン王子が壇上に上がった。銀の騎士たちは一斉に剣を抜き天をさして、一回ふつた。傭兵たちも、お座なりに同じ礼をして見せた。

美しいが線の細い声で王子は話し始めた。

「皆のものよ、いよいよ明日、我らは邪まなる魔道の使い手ヌーヴァールのすむ塔に戦いの刃を向ける。ヌーヴァールの塔には余の婚約者にしてノーム・ディーの姫イマーニュ君が囚われの身となっている。我らはヌーヴァールの狡猾なる妖術の惑わしに打ち勝ち、必ずイマーニュ姫を救いだしなければならぬ。それが名誉ある戦士の道を行く我らの果たすべく努めである。そしてまた、この戦は我らの倉を満たす黄金、白銀、紅玉、翡翠等等を皆にもたらすであろう。ヌーヴァールは悪辣な手段によって莫大なる財宝をその塔に持っているからだ。皆の剣が妖魔の血で赤く輝くことを余は期待している」

王子の言葉はそこで終わり、再びピールエが言った。

「次に、我らが軍師、智略に長けたよき魔道の使い手シャル・マール卿が明日の攻撃について話される」

壇の後ろの方から恰幅の良い四十ぐらいの男が現われた。濃い青の長衣に身を包み、木の実や動物の歯を繋げた首飾りを幾重にも下げていた。色浅黒く口髭を脂で固めてぴんとのばした四角い顔は魔

道師というより、堅実な商人といった感じだった。シャルル・マールは壇の前に来ると口を開いた。

「ヴォナプ・アロン殿下のお言葉通り、明日我らは灰と錆びで造られた虚飾の塔を攻略し、この世の花といわれるノーム・ディーのイマーニュ姫を悪魔の手より救いだす。皆も知つての通り、魔道師ヌーヴァールは様々なあやかしの術を使うという。正義はいうまでもなく我らにあるが油断は禁物だ。我が手からこぼれ落ちたカードの告げるところによれば、ヌーヴァールは灰の神、あのおぞましくも忌まわしいアー・ボーンと淫らがましい契約を交しているという。実際我らは全く奴を侮ることは出来ない。」

「だが、皆の者よ、恐れに切つ先を下げることはない、我がカードはまた次のことも教えてくれた。すなわちアー・ボーンとて全ての日、全ての時刻に於いて、この世界で力を保っているわけではないということだ。明日の正午、年老いた太陽が我らの兜の頂きを照らすとき、アー・ボーンの力は弱まり、この地上に於いてはかよわき妖精ほどの力しかおよぼせなくなる。魔道師ヌーヴァールはそのとき、師匠の本のほこりをはらう只の見習い道士に成り下がるであろう。その時こそ我らの好機だ。一気に正面から塔を叩き悪魔の居城を破壊するのだ。麗しの姫君を救い出し、剣に豊かな実りをつけたまえ。アヴユリエの御加護は我らと共に有る」

銀の騎士たちはまた剣を頭上で振り、私たちも同様見真似でしたがつた。ピールエが前に立ちよくわからない鯨波の声を上げた。

「アヴユリエ、イルマヌーヴァア！」

「アヴユリエ、イルマヌーヴァア！」

ユイスが小声で意味を教えてくださいました。

「フラーテンの古語さ、神共に座す、というようなことさ」

何人かの隊長たちは細かい作戦の指示があるため残り、他の兵たちはそれぞれの天幕に戻って行った。

私たちも自分の天幕に戻り明日の攻撃に備えて、武器の準備を整えた。

やがて陽は落ち、あたりは闇に包まれた。黒々とした夜空を見上げると雲間に星々がきらめいていたが、その光はどこかしら他の土地で見る光とは違って私の心に言い知れぬ不安をもたらす、ざらざらとした輝きだった。

私は天幕を出て細々と燃えているかがり火のあたりを歩きまわつた。少し離れた所に歩哨の姿があつたが、ちらりとこちらを見たりで私に関心は持たなかつたようだった。

私は火のそばに腰をおろした。今は春だったが、夜となると幾分冷える。聞くところによればイオロップでは真夏でも夜ともなれば得体の知れない冷気が人々の体と心に忍び寄るのだという。

私は明日の戦について考えた。先刻のシャルル・マールの話では正午になつたら正面から突つ込むというだけで作戦らしい作戦はないらしい。果たしてかのお抱え魔道師の言うとおりに、ヌーヴァールの力は正午には弱まり、我々は勝利を納めることが出来るのだろうか。いや、そもそもヌーヴァールなる魔法使いは本当にあの奇怪な塔にいるのだろうか。魔術師たちの中には常人には信じ難い生を生きるものがあるとは聞くことがあるが、伝説が真実としても二百年も前の話である。ましてや、イマーニュ姫とやらはどうなのだろうか。姫君も魔法のお陰で二世紀を生き長らえているのだろうか。

どうにもこの戦は全くの茶番なのではないかという気がしてしやうがなかつた。すべては夢幻に生きる王子の歪んだ脳の中に現われた妄想に過ぎないのではないか。我々は住む者もない廃虚に滑稽な突撃をかけようとしているのではないか。

兵士たちの間にもそういう空気がないわけではなかつた。傭兵たちは財宝とやらしか頭にないだろうし、銀鎧の連中にしても本音はどうだかわかりはしないものだ。

火が細くなり消えようとしていた。私がそばにおいてあつた薪をくべようとすると、歩哨の兵士がこちらを向いて話しかけてきた。

「おまえさんは昼間の騒ぎの主だな。眠れないのか」

「ああ、明日は何が起こるかと思つてね」

「シャル・マールはここいらでは有数の魔道師だ。きつとあのい
け好かない塔の魔術を打ち破ってくれるさ」

「本当にあの塔には怪しの力が働いているのか」

歩哨は黒革の鎧の胸元に手をいれてぼりぼりかきながら答えた。

「なるほど、半信半疑というわけか。なあに心配はいらねえ。お宝
についてはかなり確かな話だそうさ。あの殿下はちよいといかれて
るって話もあるが馬鹿じゃねえし、嘘つきでもねえ。古くさい紙の
束のことにかけちゃ確か

なもんだそうさ。それに魔法のことも本当さ。でなけりゃ財宝が二
百年ものあいだ無事でいるわけはねえ」

歩哨の話はもつとものように思えた。イオロープの傭兵たちは迷
信深いと同時に現実的だ。利益があると踏まなければこんなわけの
わからぬ戦いに参加はしないだろう。

結局は明日になってみなければ何もわかりはしない。

私は歩哨の兵士に肩をすくめて見せると、自分の天幕へ戻ろうと
した。

そのとき、声が聞こえた。

周囲の闇から、私を取り囲むように、喉の奥でたてるなんともい
やらしい、くつくつくつというような笑いが聞こえたのだ。

「おい、今何か聞こえなかったか」

歩哨は黙って首をふり否定の意を示した。私は耳を澄ましたがも
うその声は聞こえてはこなかった。

天幕にはいり横になってもその声は頭のどこかにこびりついて私
の眠りを妨げた。確かに私は笑い声を聞いたのだ。薄気味の悪い悪
意に満ちた、どこからともなく聞こえる声を。あれは塔の魔術師の
声だったのだろうか。それとも私の心の内なる声だったのか、答え
は明日にあるはずだった。

天幕を通してさしこむ朝日で目がさめた。真つ青な空が広がって
いた。まぶしい陽光が荒れた地面と奇怪な塔を照らしている。

イオロープでは珍しい快晴だった。この土地では空はどんよりと
した灰色の雲でおおわれているのが常であり、雲が切れて日がさす
ことはあっても、見渡す限り青い空が広がるなどということはめつ
たにないのだ。事実私はここ一箇月余りこのような青空は見たこと
がなかった。

兵士たちは皆空を見あげては各々の神やら守護精霊やらに感謝の
言葉をつぶやいていた。

「目がつぶれちまうような天気だな」

ユイスが朝食のスープをすすりながら言った。

「ああ、魔術師殿もこれでは目がくらんで塔から出てこれないだろ
うよ。我々の魔法使いも大丈夫なんだろうな」

「シャル・マールは闇に巣くう邪悪な輩とは取り引きはしていな
い数少ない魔術師だという話だぜ。まあ、奴に今日はおまかせだ
な」

兵士たちは集められ、シャル・マールが再び壇上に立ち、話し
た。昨日の話通り、攻撃は正午に行なうと口髭の男は語った。

「見よ、この蒼穹を。この青さこそアヴェユリエの衣の青に違いはな
い。我らの大いなる守護者がその御姿を現わし、我らに強い力を与
えてくれているのだ。勝利は我らの手にある。アヴェユリエ、イル
マヌーヴァ！アヴェユリエ、イルマヌーヴァ！」

塔には南側に大きな扉らしきものがあり、東側にもやや小さな門
があった。攻撃は二手にわかれ二つの門を同時に攻めることになっ
ていた。私たちは東の門の攻撃隊に加わることになった。

私は昨夜聞いた奇怪な声のことをユイスに話してみた。

「はあん、おまえさんも聞いたのかい」

「おまえもか」

「いや、俺はそんなもの聞かずにぐっすり眠ってたけどよ、でもな

んか変な笑い声を聞いたって、奴が何人もいるらしいぜ、銀鎧の連中の間でもそういう話が伝わってるなあ。塔の主が俺たちをからかって、あざけってるんだって、いつてる奴もいる」

兵士たちの間に一筋の不安が広がっているのは確かかなようだった。ヌーヴァールがそれを目的に声を送ってきたのならそれはおおむね、成功したようだった。

やがて正午になった。

短く鋭いらつぱの音を合図に攻撃が始まった。

軍勢は一斉に塔へと押し寄せ、巨大な、攻城用の破壊槌が鉄とも石ともつかぬ不思議なものでできた門扉に叩きつけられた。二度、三度、四度と破壊槌は扉を打ち、大きな音を轟かせたが塔からはなんの反応もなかった。鉤の付いた縄が塔の狭間胸壁に投げられ、勇猛な兵士たちは得体の知れぬ魔術師の塔へ乗りこんで行く。

白馬にまたがった王子は近衛兵たちと共に破壊槌の後についている。その後ろ姿は随分と緊張して固くなっているようだった。戦に出るのは初めてなのかもしれない。

私の隊はやや後方に位置し、門が打ち破られたら突入する手筈になつてた。

突然私の耳にあの声が入り込んで来た。昨夜聞いたくつくつくつといういやな笑い声だ。辺りを見ると今度はその声が聞こえるのは一部の者だけというわけではないようだった。誰もが不安そうな顔で周囲を見回していた。

笑い声は続き、破壊槌の動きが止まった。

空が見る見るうちに暗灰色の雲でおおわれていった。水溜りが広がるように暗い渦巻くように速く動く雲が青い空を覆い尽くしていった。

「惑わされるなー！これは幻だ、ヌーヴァールの幻術に過ぎない！アヴェユリエの御加護は我らにあるぞ」

シャルル・マールが王子の隣で必死に声を張り上げたが聞いていない者はいないようだった。

ついに空は隅から隅まで黒雲に覆い尽くされ地上は夕暮れ時のように灰色の薄闇に閉ざされた。

「やれやれ、我らが魔法使い殿はカードの切り方を間違えたらしいぜ」

隣でユイスが皮肉と恐れを込めてつぶやいた。

シャルル・マールは数珠を手に取り、目を閉じて、呪文を唱え始めた。あまり、神秘的な雰囲気のある男ではなかったが、さすがに今の表情は目に見えない何かを感じさせるものがあつた。

魔道師は両手を広げ、天を仰いで叫んだ。

「我が友なる風の精霊よ、ヴィナーリスクよ、我に力を貸したまえ、この邪悪な黒雲を吹き払いたまえ！」

一陣の風が起こつた。東の方から吹いてきた風は黒雲を押し流そうとしたがその力は十分ではないようだった。一筋、二筋、ちぎれた雲が流れていったが、後から後から沸き起こる雲がその後を埋めていった。

次の動きは塔の方から起こつた。兵士たちの悲鳴が聞こえ、胸壁の上から鎧姿の兵士たちが赤い血を吹きながら落ちてきては地上に叩きつけられて行つた。兵士たちを追い落としたものが胸壁に姿をあらわした。敵軍の兵士が初めてその姿をあらわしたのだ。

奴らは鎧兜を身に付け、二本の足で立ち、二本の手を持ち、頭もひとつだったが決して人間と呼べるようなものではなかった。

その体は灰色や茶褐色、黒の毛皮におおわれ、顔は猿、狼、そして兎を掛け合わせたかのような獣の顔だった。獣人たちは手に持った円月刀を振るい、次々に王子の兵士たちを斬り裂いていった。奴らに剣技のようなものはほとんどないといってよかつたがどう猛さはナルヴェーンの狂戦士もかくやと思われる凄さだった。たちまちの内に塔の下には血みどろになつて死んだ兵士たちの死体が山となった。

重い音がして、塔の正門が開いた。兵士たちは破壊槌を残して、後退さる。彼らの顔には闇を恐れる幼子のような恐怖が張りついて

いるようだった。

扉の向こうからは獸人兵の大軍が飛び出して来た。硬い毛に包まれた獸の兵士たちは幅広の蛮刀で恐ろしい殺戮を開始した。奴らの強さは圧倒的だった。奴らとまともに斬りあえば銀鎧たちの鍛え抜かれた鋼鉄の剣も半ばから折れ、銀の胸甲は朱に染まった。ましてや傭兵たちの革の鎧など紙のように斬り裂かれ、真紅の噴水がそこで吹き出した。戦場には血の臭いと、今ひとつの臭い、獸人たちの獸の臭いが満ち、それだけで普通の人間なら十分吐き気を催すようなものだった。

兵士たちは勇敢に戦ったが、大嫌に刈られる稲穂のように次々と彼らは荒れた地面に倒れていった。

獸人兵の死の嵐は東の門の方へも凄まじい速さで近づいてくる。傭兵たちの中にはくるとときびすを返し逃げ出す者も出たが奴らの足はその姿と同様並みに速かった。逃げる男たちの背に反り身の刃が突き刺さり血の雨を降らせた。

「おまえさんの海の向こうの剣法の力の程を見せてもらえそうだな」

ユイスは軽口を叩いたがその髭面は余りゆとりある表情とは言えなかった。

「王子様は単取り屋でも呼んでおけばよかつたのさ」

私の台詞に答えるかのように単面の怪人が襲いかかってきた。恐ろしい速さで円月刀を繰り出してくる。切っ先が私の胸甲の表を斬り裂いた。

私は大きくのけぞり一瞬死を免れたが、すぐさま次の一撃が頭上に降りかかって来た。地べたを転がりながら奴の剣をよけ、腹の鎧の隙間を狙って剣を突き出した。

ぎぎーっという耳を塞ぎたくなる声をあげて奴は倒れた。腹の傷からはどす黒く、異様に生臭い、異臭を放つ血が吹き出している。どうやらこいつらも生身の生き物らしい。

立ち上がると同時に次の敵が来た。こいつはひひの化け物のよう

な顔をしている。両頬からのびた胸までとどく白い髭がひどくいやらしく汚らしく見えた。奴は飛ぶように地をはね、剣を繰り出してくる。私は必死で奴の剣をよけたが、奴は自分の振り回す剣に興奮したかのように口からぶくぶくと泡を吹き、狂ったように攻撃してくる。

奴の剣が私の肩に打ち下ろされた。鉄の肩当てがへこみ、大岩でもぶつけられたような衝撃が走る。私は剣を取り落とした。

奴の剣が迫る。

突然、奴の口から吹く泡が赤く染まった。毛むくじやらの喉元から剣がぬつと突き出し、奴は崩折れた。

「どうした、異国人、すっかり剣技を見せてくれよ」

ユイスが返り血を浴びて真っ赤になった顔で後ろから姿をあらわした。

「これから、いい所だったのさ」

「まだまだ化け物はたくさんいるぜ。とくと見せてもらおうか」

私たちは次から次へとやってくる獸の兵士たちを相手に剣をふるい続けた。剣は柄まで血みどろとなり、鎧はあちこち切られて、傷口から流れ出た血が服の下でぬるぬるして気持ちが悪かったが、体を拭いている暇はないようだった。

獸人兵たちは全く恐れというものを知らないようだったが、その数は初め思ったほどではなく私たちの半分ほどであるようだった。もつとも今では王子の軍は半分以上打ち倒されているようだったがらほぼ同じぐらいというわけだ。兵士たちは最初の衝撃からやや立直り反撃に転じていた。異常な力強さはあるものの敵は頭も獣並みのようであり落ち着いて戦えば何とか立ち向かうことも出来るのがわかってきたようだった。

私とユイス他数名の傭兵たちは東の門から百イートばかりのところで獣どもの首をかき斬っていたが、数十イートほど南よりには王子とその護衛の兵士たちがいた。近衛兵たちはピールエ他数十名ばかりの男たちで兜には一際大きな青と紫の羽飾りが揺れている。

剣を振るう合間に垣間見ると、王子自らも剣を手にして戦っていた。ユイスが文武両道に秀でていたのは嘘ではなかった。手にした細身の長剣は普通の男が持つ剣にしては随分と軽そうだが物で柄頭には宝石が散りばめられていたがその切っ先は優美な死の舞いを踊り、獣人兵たちを血祭りにあげていた。返り血を浴びた王子の青白い顔は自らの所業に悩む地獄の公子といった面持で、この姿を絵にすれば宮廷の婦人たちを悩ますことは確実のようだった。

その側には我らが偉大なる魔道師シャール・マールがいた。彼は肉体の争いには全く不得手のようで、木の実や動物の牙を繋いだ数珠を手にして、何やら呪文のような物を口にしながら敵の刃を必死の形相でかいくぐっていた。

戦は続き私たちの足許には敵味方双方の死体がつまっていた。灰色の地面は人と、そうでないものの血を吸ってどす黒く染まり、飛び散ったぬるぬるするはらわたが足をすくった。

私たちの腕には疲れが忍びより、次第次第に剣を振るう速さが鈍って行った。対する獣人兵たちは恐れと共に疲れというものも知らないらしく、門から出現したときの力と速さを今も持ち続けている。

王子の軍の数はもはや初めの三分の一ほどにまで減っているようだった。我々はいつものまにか一個所に追い詰められ、三方から獣人兵たちが迫っていた。奴らは戦いと血の臭いに興奮し、目玉を赤く血走らせ、口元からは泡を吹いて、剣を突き出してくる。

「殿下、撤退しましょう、このままでは皆この獣どもの餌食となるばかりです。ここは一度引いて、新たな攻撃の策を練るところですぞ！」

ピールエが怒鳴るのが聞こえた。王子の姿は私からは兵士たちの影になって見えない。

「王子、退却です！」

再びピールエが叫ぶ。

「その軍人はまだ頭がちゃんと働いているようだな」

頭上から大音声が響いた。振り返り見ると声の主は塔の中程の高さの所にある露台に立っていた。

ここから見てもその男が身の丈八イートはあろう巨人であることはわかった。堂々たる体格で黒い長衣の下の胸や肩には筋肉が山のように盛りあがっている。角張ったいかめしい顔は髭で縁取られ、眼光は私たちの胸を突き刺すようだった。胸には金色に輝く大きなメダルを下げている。

「我こそはパアリシユの主たる魔術師、イオロープのあまたの魔法使いの中でもっとも暗闇の技に秀でたる魔道師ヌーヴァールである。脆弱なる手品を使うダーチェン人とその主のひ弱な雛のような王子、それに愚かなる盲従と欲望に惑わされし兵士どもよ、すみやかにこの地より立ち去れ。我が塔の周りより姿を消せ。お主らの行ないは全くの徒勞、虚しい戦だ。お主らは我が塔に一步たりともいることは出来ない。この塔は我が術により呼び出された異界のものどもにより守られている。彼らの姿と力はお主らがいまでも見ている通りだ。」

「王子ヴォナブ・アロンは書庫の暗がりから産み出された妄想に蝕まれている。すべては幻、お主らの流した血は何も産み出すことなく、ただ荒れ野を赤く染めるばかりだ。立ち去れ、立ち去れ、さもなくば更に恐ろしい運命がお主らを襲う」

塔の人物ヌーヴァールは割れ鐘のような声でそう言った。その声はただ大きいだけでなく、まるで魔道師が我々の耳もとで、あるいは頭の中で話しているような奇妙な感じで響いた。

私たちは塔の方を見つめてその場に凍りついていた。獣人兵たちは私たちの出方を見るように剣を振るうのを止め、一步退いて私たちを取り囲んでいた。

動きを止めた獣人兵に斬りかかって行く者は誰もなかった。次何が起こるのか、何をすればいいのか、誰も知らなかった。言葉もなく、動きもないまましばし時が過ぎた。

塔の魔道師が沈黙を破った。

「どうやら、お主らはここで荒れ野の滋養分となりたいうようだな。ならばその望みをかなえてやろう」

ヌーヴァールは胸のメダルに手をやり、両腕を胸の前で輪を描くように振り、一声叫んだ。

「ドウボヌ、エリ、ジュステイン、ジュナーヴ、エラ」

彼が叫んだ言葉はそういう風に聞こえた。

近衛兵のひとりが金物を掻きむしるような悲鳴を上げた。彼は盾と剣を放り出すと一目散に逃げ出した。

彼の声が呪縛を打ち破ったようだった。次々に悲鳴をあげて兵士たちは塔に背を向け駆け出した。

「貴様らー！逃げるなー、殿下から離れるな！」

ピールエの怒鳴り声は何の役にも立たなかった。

空をおおっていた黒雲に変化が現われた。丁度私たちの頭上の部分にまるで巨大な目玉のような渦巻きがあらわれたのだ。渦巻きは泥水の中の渦のようにゆるゆると回転し、その中心は次第に色が薄れていった。見る間にそこは真っ白になり、鈍く輝き始めた。

「シャル・マール卿、何が起ころのだ」

ピールエがいう。これに対する魔法使いの返答は震え気味の一言だけだった。

「わからぬ」

「殿下！」

「よし、致し方あるまい、この場は逃れるしかないようだ」

青ざめた顔で王子がいった。

私たちは塔から逃げ出した。獣人兵たちは無表情に見ているだけで追ってこようとはしなかった。ヌーヴァールも何も言わず露台上に立っていた。

頭上の雲だけが生き物のようにうごめき、白い光を明滅させていた。

頭の上から冷たい風が吹いて来た。うなじを氷で撫でられるようだった。

白く輝いていた部分が血を流し込んだように赤く染まった。その赤い部分が稲妻のように地上に降りて来た。

すぐ側にいたひとりの近衛兵が世にも恐ろしい叫び声をあげた。天から降りて来たものは赤い腕だった。何本もの葛が絡み合ったような人間の胴程もある腕だったのだ。無数のいぼや髭のようなものにおおわれたそれは三本の鍵爪のついた指で憐れな兵士をがっちりつかむとするすると空に戻って行く。

頭上から、また魂切るような声が聞こえ、私たちの上に血と押し潰されたはらわたや手足、生首が降ってきた。兵士の血まみれの顔は信じ難い恐怖に歪んでいた。

私たちは一斉に駆け出した。冷たい風と共にまた腕が降りてくる。傭兵のひとりがつかまった。鎧がものすごい力にへこんでいく。

「この化け物ー、くたばりやがれ！」

汚ない罵詈雑言をはいてユイスが腕に斬りかかった。だが、腕は石でも出来ているかのようにユイスの刀を跳ね返し、口から血を吐いている男をさらって行く。

あの笑い声が聞こえてきた。喉の奥を鳴らすような耳障りな響きのその声はあざけりをこめて、私たちの頭の中に響き渡った。

血と肉の雨が降り注ぎ、私たちは為す術もなく逃げた。ひとり、またひとり赤い腕に捕われ確実に悲惨な死がばらまかれていく。腕は正確に私たちの上に死骸を落とし、私たちは皆、血と潰された肉片を浴びて頭から真っ赤に染められていった。わけのわからないわめき声を聞いたと思ったが、どうやらそれは自分の声のようだった。

4

恐怖に満ちた逃亡がどの位続いたものかわからない。気がつく

私は家ほどもある石柱の影に倒れていた。空には真つ黒な雲はもうなく、薄い灰色の雲から傾きを増した太陽が見え隠れしていた。赤い腕の出できた白い輝きはなかった。

全身に浴びた血と何かぬるぬるする物が乾き始めており、いやな臭いがして、ひどく気分が悪かった。体は冷えていて背中に寒気が走ったが、頬だけはやたらと熱い。

私はよろよろと立ち上がった。剣はまだ手にしていた。

数十メートル先から、塔のある荒地が始まっており、おぞましい魔術の巣窟がそびえたっているのが見えた。

塔とは反対側数十メートル向こうの石柱の下に何人かの人影が見えた。私のほかにも生き残りがいるらしかった。

十人ばかりのひどく汚らしい姿になってしまった人々が座りこんでいた。ヴォナプ・アロン、ピールエ、ユイス、三人の銀鎧と四人の傭兵、それに我らが魔道師シャル・マール卿だった。傭兵の中にはユイスもいた。

「おう、おまえさんも生きてたのかい、さあ、何か良い知恵を出して学のある所を見せてくれ」

強気の台詞だったが、ユイスの血まみれの顔は全くさえないかった。私は無言で座った。

王子はとても疲れた様子で両手で膝を抱えて座っていた。兜は戦の最中になくしてしまったのか、乱れた金髪は血がこびり付き固まっている。青白い頬にも血と泥。唇は水死人のように紫がかって見えた。左腕に傷を負ったらしく、巻かれた白い布に血がにじんでいる。

だが、彼の瞳は輝きを失ってはいなかった。薄青の瞳は塔の方に向けられ、いまだ夢見るような輝きを帯びていた。その目の光には昨日天幕の中で見たときにはない、ぎらつくような強いものすら加わっているようにも見えた。

「シャル・マール卿、なにゆえ、その方の魔術は力を発揮しなかった。なにゆえ、カードは我らを裏切ったのか」

王子は口を開いた。奇妙なくらい冷静な声だった。

「は、誠に申し訳ございませぬ。このうえは……」

「シャル・マール、私はその方を責めているわけではない。これから、いかにして、あの塔に攻め入り、我がイマーニュ姫を救い出すかを考えたいのだ」

「殿下！何を申されます。こ、この我々の姿が御目に映らないのですか。四百人からいた兵士たちは、皆死にました。それもたかだか数刻の戦でですぞ！そこでのうのうと生き残っている腹の出た手品師のお陰で。このうえ、あの恐るべき妖術師の塔へ十人で何をいたそうというのですか。殿下の御命すらいまだ奪われていないのが不思議だというのに！ラーヌへ御戻りになってください、それが賢明なる方策と存じますぞ」

ピールエが強い口調で言った。

「ピールエ、一度ラーヌの城に戻れば父上は二度とこのような戦はお許しにならないだろう。私はロマーヌあたりの姫君を嫁に迎え、生涯、死よりも恐ろしい退屈な夢のない日々を送らねばなるまい。それはその方もよく知っていることであろう」

ピールエは険しい顔で首をひねった。

「殿下、殿下にはフラテン王家に生まれたものとしてのつとめというものがありません。王子として為すべきことはこのような無益な戦いではないはずですぞ。ヌーヴァールは確かに邪悪な魔物と取り引きをしていると言われておりますし、事実、その証拠を我々は見たわけですが、奴には諸国を治めようなどという野望はありません。魔道師などという輩には、黙って、怪しげな鍋でもかきまわさせておけばよいのです。王子には王子のつとめがあります」

シャル・マールは不愉快そうにピールエをちらりと見たが何も言わなかった。

「この戦は無益ではない。ノーム・デイーのイマーニュ姫を救いだすという大儀がある。これはノーラ・パナツヴの生まれかわりたるこの私の義務だ。これこそ私のつとめだ」

王子は断固たる口調で言った。

「殿下はこの似非手品師にたぶらかされておいでなのです。この男は殿下のおやさしい心に取り入り……」

「それは真実ではない。私がこの戦に加わることになったのは、殿下に招かれてのこと。そのとき、殿下は既に御自分のお力で、ヌーヴァールの塔のことをよくお知りであった」

シャルル・マールは首に掛かった数珠をまさぐり、髭の軍人をにらんだ。

「その通りだ、ピールエ。私は自ら塔とヌーヴァールとイマーニュ姫の伝説を調べあげ、様々のト占でこの話と自分との関係を調べた。初めて父君の書物で読んだときから私には予感があったのだ。三つの占いの結果はいずれも同じだった。私とイマーニュ姫の強いきずなを示していた。それゆえ、私は姫を救い出すことこそ私の唯一正しいつとめと信ずるにいたったのだ」

「殿下、お目をお覚ましくください。殿下は夢を見ておられるのです。二百年ものあいだ生き長らえている人間がどこにいましよう。ヌーヴァールは今日の戦でよくわかったように極悪非道の怪物です。よしんば塔の中に入れても殿下が夢見るようなことが待っているとは私には思えません」

「ヌーヴァールは書物の中、伝説の中の幻ではなく、この目で見、その邪悪な力を感じ取れる存在であった。ならなぜ、イマーニュ姫が幻であると言い切れる？ 姫が、ヌーヴァールの妖術で眠らされ二世紀の間、救いの手を待っていないとなぜいえるのだ！」

なるほど、私は夢幻につかれているのかもしれない。フラータン王家の第八王子という立場を忘れ、大事なつとめとやらを放り出しているのかもしれない。だが、それがどうしたというのだ。私は、私は夢想がなくては生きていけない人間なのだ。現実だけでは私は生きではいけないのだ！」

王子の声は灰色と茶色のねじれた固まりが立ち並ぶ廃都にこだました。握られた拳が震えていた。

「皆を無理に引き留める気はない。去りたい者は去っても良い。私はひとりでもあの塔に攻め入る。イマーニュ姫を助け出すのだ」
沈黙が場を支配した。陽は地平線近くの厚い雲に隠れ、あたりは濃い灰色の闇に包まれていった。

「お、俺はいやだ、もうこんなわけのわからない戦はいやだ」
銀鎧の兵士のひとりが立ち上がり、足早に立ち去って行った。
四人の傭兵たちはごそごそと皆から少し離れて相談をしていたが、やがて三人が私たちに背を向け、歩み去った。ユイスは残った。

互いの顔が見えないほど暗くなって来た。天幕の後から拾って来た松明に火が点された。天幕はすべて、あの赤い腕によつてめっちゃくちゃに引き裂かれ、破壊されていたのだ。

「では、残りの者は私と共に来てくれるのだな」
「私は殿下を無事にラーヌまでお連れするつとめがあります」
ピールエが固い声でいう。

「私は殿下に請われたつとめを果たす」
魔道師はぼそりと乾いた声を出した

「俺はお宝にまだ未練がある。それに面白そうだからな。こんな馬鹿な戦にはとんとお目にかかれないうだろうよ」
ユイスが明るく言い放った。

「傭兵、なんという言いぐさだ。殿下に失礼であろう」
「ピールエ、よい。私は馬鹿なことがしたいのだ。面白いからとは結構な理由だ」

王子の声が和らいだ。松明の橙色の光の中の顔には笑みがあった。
「スナブ・ランケン、おまえも一緒に行つてくれるのか」
「お供しますよ。僕も面白そうだと思いますからね。ヌーヴァールとイマーニュ姫の伝説の真実をこの目で見たい」
「そうか」

王子の笑みには共感出来る者を見出した喜びがあった。

「おい、シャルル・マール卿殿よ、今度こそは大丈夫なんだろうな。水門の向こうにはまたまた単野郎がお待ちじやあたまらないぜ」

ユイスが後ろを振り返り言った。

「うるさい、若造。一日に二度も過ちを犯すほど愚かな術者ではないわ」

シャルル・マールが筋の通るようなそうでないような答えを言った。一度なら過ちも許されるというわけなのだろうか。

私たちは塔の北側から流れ出している幅十五メートルほどの小川の中を歩いていった。膝までの水は冷たく、足の先がしびれてくる。

小川とはいってもどう考えてもまっとうな川とは思えなかった。

シャルル・マールと王子の話では塔の中に泉があつてとうとうと水が湧き出ているそうで、ヌーヴァールはこの川に使い残しの怪しげな魔法の薬やら何やらを流しているということだった。そのうち、水に使っている膝から下は鱗が生えて、指は三本くらいになつてしまふのかもしれない。

空はほとんど雲におおわれ星は見えない。わずかに塔の頂きあたりの雲が切れ、二つ三つ輝くものが見えたが、その輝きには不吉なざらつく色しか感じられなかった。

ほとんど明りのない中を私たちは進んだ。川は何者かが大昔に作った水路のようで底と両岸をおおっている薄い土の下には切り出した石を敷き詰めてあり、ところどころではそれが剥き出しになつて、足の下に固い感触を与えた。

この作戦も基本的にはシャルル・マールの呪術で決められたものだった。皆の見守る中で行なわれたカード占いによると今日の真夜中にこそ、ヌーヴァールの魔術の力が弱まり塔が無防備になるとい

うのだ。それと川を遡る者には妖術が効かなくなるという古くからの言い伝え―これは王子が主張した―、それに闇に乗じて忍び込めるという点でピールエも納得し、この行軍となったわけだ。

シャルル・マールは昼間の攻撃に際して彼の占いがはずれ、魔術が効力を発揮しなかったことについて、様々な自然、超自然の要素が微妙に複雑に絡み合った結果だと説明した。つまりは偶然の結果だということらしい。魔道師は掌ほどの大きさの薄板に青いインクで呪文を描いた護符をふところから取り出して自分の魔術が力を持つていたことを釈明した。

「この護符が殿下と私とピールエ殿の命を塔の獣どもから護つていたのだ。これはマドラーゴの汁を用いた強力な護符だ。あらゆる闇の呪術から持ち主を護る力がある」

「マドラーゴと言えば貴重な薬草だからな、お汁が足りなくて三つしか出来なかったわけだ」

ユイスの皮肉に満ちた台詞に魔術師は眉根を寄せて答えた。

「その通りだ。だが、今なら全員の分を作ることが出来る」

ピールエはその場で護符をちぎり、捨てた。

私の胸にはその護符が揺れているが確かに何かの力がそこからは発しているようだった。護符の当たる胸のあたりがなんとなく暖かく感じられた。

次第次第に塔が近づいてきた。黒い夜空の中になお黒く塔はそびえたつていて。いつから建っているのか、誰がなんのために建てたのかは誰も知らない。王子やシャルル・マールもそれを知らなかった。ヌーヴァールはこの塔の居住者だが作り主ではないのだ。

塔は暗黒の芸術につかれた気狂い建築家の作品のように私には思えた。このパアリシュの街全体が彼の作品なのではないかとさえ思える。ここは人の手で造られた廃虚なのではないか。

私たちは進んでいったが塔からは何も動きはなかった。北側にもいくつも狭間胸壁のようなものや露台らしきもの、三角や菱形や円形など様々な窓があつたが明りはもれてはいなかった。ヌーヴァ

ルーは夜はきちんと眠る主義なのだろうか。そうは思えなかった。

小川は塔の真下で鉄格子に閉ざされていた。十五イート四方の四角い穴ぐらは太い鉄棒でおおわれていた。

銀鎧の兵士たちが叩いたり、揺すつたり調べたが外れそうはなかった。

「さて、どうするね、魔術師殿」

ピールエが格子の向こうの闇を見つめていった。

「何とかなるだろう」

シャルル・マールは懐中から印籠を取り出し、中の何かを鉄格子に塗り付けた。

「殿下、危うございます」

魔術師は木の実で作った数珠を持ち、印を結びながら口の中でうなるような呪文を唱えはじめた。

「塔の主を起こさないように願うぜ」

ユイスが茶化したのが魔術師の耳にはとどいていないようだった。

一瞬、魔法使いの背中与肩が盛りあがったかのように見えた。彼の全身から鈍い赤い光が起こり、それは彼の頭上で束となって鉄格子へと走った。鉄格子に塗られていた葉が真っ赤に燃えて光り出し、ばんという音をたてて、鉄の棒が折れた。

「見事な火の魔術であったぞ」

「なんの、ごく初歩的な手品に過ぎません。さあ、はやく、ヌーヴァールの眠りは浅いかもしれませんが」

私たちは暗黒に包まれた塔の内部へとはいっていった。

シャルル・マールが短い呪文と共に印を結ぶとその左手の先に桃色の小さな火の玉が現われ私たちの行く手を照らした。

小川の両側には細い通路がつけられており私たちはそこを歩いた。まわりは巨大な鉄とも石ともつかぬ物の柱が縦横斜めに走った櫓状の構造になっている。魔術師の火の玉の光が複雑な陰影を作り出していた。

右手の壁際に急な階段がつけられており私たちはそこを上がって

いった。

「どうやってお姫様を見つけだすんだい。こんなわけのわからないところで」

ユイスが言った。

「人間の発しているある種の目に見えぬ光を感じる石がある。『ミドローナの石』という物だが、それを使う」

先頭を行く魔術師が答えた。

「あんたが持つてるのかい」

「私が持つている。二年がかりで造り上げたものだ」

王子は懐から小さな卵ほどの大きさの丸い石を取り出して見せた。乳白色で薄い灰色の斑が浮いている。

「この石が緑色の光を発する。光の強くなる方へ行けばよい」

「我々には反応しないのですかね」

私は聞いてみた。

「私たちの光には感応しないように術をかけてあるのだ」

階段を上がり切ったがそこも下と同様に縦横に走る柱や梁でいっぱいだった。ここにも明りは全くない。人や獣の気配もない。足許から聞こえてくる水音と自分たちの足音が聞こえてくる全ての音だった。

私たちは廊下を進んで行った。王子の『ミドローナの石』はまだ

光らない。

通路はゆるく左に曲がって続いていた。塔の中をぐるりと回っているらしい。両側には三十イートおきくらいに重そうな扉が並んでいた。

「お宝を見つけてくれる石はないのかねえ」

ユイスがつぶやいた。

「その扉でも開けてみたらどうだい。もしかすると宝物庫かもしれないぜ」

私は彼に冒険をすすめてみた。

「ふふん、そうだな」

驚いたことにユイスは近くの扉の握りに手をかけた。

「今はまだやめておいた方がよいぞ、ヌーヴァールを倒してから……」

シャル・マールが止めたが既に扉は数メートル（数センチ）開いていた。

中から光がもれていた。わずかに赤や緑、青や紫を含んだ白いきらめき。

「ユイス、やめろ」

私は背筋に何か冷たいものが走るような気がしてそう叫んだ。

ユイスは手を放したが扉は勝手に開いていった。まばゆい輝きが闇の中に溢れ出てくる。

私たちは部屋の中をのぞきこんだ。

そこは紛れもなく宝物庫だった。小さな部屋いっぱい金銀、金剛石、翡翠、碧玉、紅玉、黒曜石、それに珊瑚や象牙の細工物など、あらゆる類いの財宝が山となっていた。宝は文字通り部屋から溢れんばかりで、ほとんど床が見えないほどの量だった。

私は奇妙なことに気づいた。部屋の中にはろうそくも松明も見あたらないのに宝はまばゆいほどに光り輝いているのだ。宝の山自体が不思議な輝きを発しているようだった。

「た、宝だ！宝だ！」

声をあげたのはユイスではなく銀鎧の男のひとりだった。兵士はつかれたような笑いを顔に浮かべて、部屋の中に走り込んでいった。

「止めろ！イスキン、わなかもしれんぞ」

ピールエが若い兵士の肩を押えようとしたが遅かった。イスキンと呼ばれた男は財宝の山に飛びこんだ。

空ろに響く笑いをあげながらイスキンは宝に身を埋めて転げ回った。

「わははは……俺は宝を手にしたぞ、こんな化け物の住処までひどい思いをして来た甲斐があったというものだ。は、は、見ろ。これ

を、俺の、俺の宝だ！わははは……」

「イスキン、この部屋からはやく出るのだ、私は感じる、ここにはなんらかの怪しの力が働いているぞ、はやく出るのだ！」

シャル・マールが警告した。

ざわざわじゃらじゃらという音が聞こえてきた。イスキンが宝を手ですくってはこぼし落とす音かと思ったがそれだけではないようだ。

宝が動いているようだった。狂ったように笑い続ける兵士の下できらめく山のような財宝が脈打ち、盛り上がり、うごめきだした。

「イスキン、はやく出ろ！」

誰かが叫んだときには恐怖は始まっていた。

海の波のようにうごめく、生きた宝は兵士の体をその中に飲み込もうとしていた。

「何だ、何だ、これは！おお、何だ、どうしたんだ！」

イスキンは目を大きく見開き、自分の体にまといつき自らの中に埋もれさせようとしている、動く宝物の山を凝視した。

「助けてくれー！足が動かない、足が、足がなくなっちゃった！足が、足がない！」

私は足許の宝を蹴散らして部屋の中にはいり、イスキンの手を握って力の限り引つ張った。ユイスがすぐに来て、もう片方の手を引つ張る。

宝はイスキンを中心に渦を巻くように動き、蟻地獄への底に引き込むように彼を飲み込んでいく。既に腰まで彼の体は宝物の中に埋もれ見えなくなっていた。

私たちは渾身の力を込めて引つ張ったが、イスキンの体は一向に動こうとはしなかった。彼の叫びが部屋にこだました。

「ああー！体がなくなっていく、助けてくれ、助けてくれー！」

「シャル・マール卿、何か呪文でも唱えてくれ！」

私は怒鳴った。一流の魔道師は口を開けて私たちを見ていた。顔には恐怖の表情があり、口髭の端が震えているようだった。

「卿！力を！」

ヴォナブ・アロンが叫ぶ。

シャルル・マールはやっと自分の仕事を思い出したように、胸の数珠を手にした。

「ウォニージェ、ルカーヴ、ルド、コテイイスヒスキヴ、ルド！」

呪文を終えると同時に魔道師は彼の手の先に燃えていた桃色の火の玉を生きた宝に投げつけた。

火の玉は桃色から黄色に、そして青白く色を変えながら私たちの肩の上を通って宝物の山のまん中に命中した。

一瞬、宝の山が強く白く光を発し、燃えあがった。思わずイスキンの手を離しそうになったが、炎はすぐ消えた。宝の山を青紫の光がおおい、その動きが止まった。

ユイスと私は顔を見合わせ、ここぞとばかり、イスキンの手を引く張った。

底なし沼の泥の中から抜け出たようなざぼりという音とともに兵士の体は宝から抜け出し部屋の外まで飛び出した。もうひとりの銀鎧がさかさ扉を閉める。

私たちはさらにおぞましいものを見ることとなった。彼の下半身は既に人間のものではなくなっていた。それは大小様々の輝く結晶の固まりと化しており、赤や青、緑や金色に美しく光っている。それは廊下のこちら側に飛び出した時の衝撃で膝や足首のあたりでいくつにも砕けてしまっていた。

人の姿を止めているイスキンの上半身はまだ息があるらしく死にかかった芋虫のように身をよじっていた。

ピールエが剣を抜くと哀れな男の首をはねた。吹き出る血はまだ赤かった。

「ヌーヴァールの力は今弱まっているのではなかったのですか。我が友イスキンは死にましたよ」

生き残った銀鎧の兵士一名をジェイスと叫ぶ者がシャルル・マールに詰め寄った。灰色の瞳に涙があふれているように見えた。

魔術師はまぶたを伏せて低い声で答える。

「すべての力が消えるわけではない。この部屋は一種のわななのだ。仕掛けておけばいつでも効力を発揮するものだ、直接に今ヌーヴァールが呪文を唱えなくてもな。イスキンには気の毒なことだが、彼の煩惱が魔物の牙に引っかかってしまったのだ」

ジェイスは何も言わずに髭の魔道師をにらみつけた。

「護符の御利益はなかったが、卿はこれをどう釈明なされる」

ピールエがいんぎんな口調で尋ねた。

「すべての矛を防ぐことの出来る盾はない」

「さあ、先を急ごう。ぐずぐずしているとヌーヴァールが力を取り戻す。シャルル・マール卿、後どのくらい、アー・ボーンの力は弱まっているのだ」

王子の問いに卿は青い長衣のふところから掌ほどの機械時計を取り出した。

サンジェリイでもこれほど小さな物を見たことがなかった。

「あと一シテイルほど（約一時間）は大丈夫かと思われませう」

「そうか、では先を急ごう。次の階に行くのだ」

階段は地下から上ってきた階段のすぐ近くの壁面に張りついていた。がつつちりとした鉄のような物で作られていたが幅は狭くひとりずつしか歩けない。

明りを手の先に点したシャルル・マールが先頭になり私たちは奇怪の塔を昇っていった。階段は長くなかなか次の階にはつかなくかつた。桃色の魔術の明りは弱々しく、十五イートくらいの所までしか見えなかつたが、私たちは柱と梁が梢のように張り巡らされた中を昇っていくようだった。足許の階段はぐらついたりはしなかつたがこつんこつんと冷たい響きで足音をこだませ、私たちの心に不安を忍び込ませた。

私の前にはユイスがいたが彼は腹のあたりが何か気になるらしくときおり手をやってはさするようなそぶりを見せていた。

「ユイス、腹でも下したか。こんなところでしゃがむにはかなりの

度胸がいるなあ」

「ああん？何でもない。ちょっと冷えただけさ」

ユイスはぎこちない笑みを浮かべた。

上の方に青い光が見えてきた。ぼんやりとした淡い光だ。前を行くシャル・マールや王子の姿が黒い影になって浮かび上がる。

私たちは次の階に出た。

そこも基本的なつくりは変わらず、壁と高い天井には柱や管状の物が縦横に走っていた。ただこの階は塔の平面全体をしめる大きな部屋になっっているようで、広い床の上には異様に細かい呪文のような物が書きつけられていた。青い光は天井から鉄の棒のような物で何本もぶら下がっている縦長の卵形の物から出ていた。その明りは人の頭ほどの大きさがあり、かすかなじーっという音を立てて青い光を発していた。私はサンジェリーの街を照らすデリン灯を思い出した。なんらかの原理による人の作った明りなのだろう。

広い部屋の中央部には太い柱が突き立っていた。幅が七イートほどもある円柱で、扉のような物が見える。床の上にはとところどころに何だかわからない機械のような物が転がっていた。小さい物は頭ほどだが、大きい物は馬ほどもあり、形もまったく様々だったがどれも円筒や円盤、何十本もの管状の物が絡み合い複雑な姿を見せていた。

見渡した印象はがらくた置き場というような感じだった。放置されている機械のような物はいずれも本来の働きはしなくなつて久しい廃物のようであり部屋全体に荒廃した色があった。青い灯もついていない物が見受けられた。

王子は『ミドロメの石』を掌にのせた。緑色の光はなかった。

「ここにもいないようだな」

王子が誰に言うでもなくつぶやいた。

私はまたユイスが腹をさすつているのに気づいた。表情がなんとなくおかしい。不安がつているようであり、まわりの目が気になるようにも見えた。

「おい、ユイス、腹がそんなに痛いのか」

「な、何でもねえ、何でもないんだ。冷えただけだ」

ユイスはさつきと同じ答えを繰り返したが、額には汗が浮いていた。

「ユイス、おかしいぞ、その手を退けてみる」

彼の押えた腹のあたりが光つているように見えたのだ。

「何でもない。何でもない。これは俺の物だあ！」

私は力づくで彼の手を退けた。革鎧の腰帯につけた小袋が脈打つように光つていた。

「貴様、それはイスキンの！」

銀鎧のジェースが激昂してユイスに斬りつけてきた。

「あは、あははは……」

ユイスは狂つたように笑い、剣をかくぐると駆け出した。

「ユイス！待て、その宝石を捨てろ！」

シャル・マールが叫ぶ。

私は彼を追い、走った。腰に抱き着き、引き倒そうとした。ユイスは猛烈に抵抗し私の鼻面を殴りつけた。鼻血が出てきて、口にはいった。

私はユイスの小袋を引きちぎり、放り投げた。氷よりもそれは冷たく一瞬、手の感覚がなくなった。

ユイスは体の力が抜けたようにその場に崩折れた。

「見ろ！化け物だ！」

ジェースが悲鳴に近い叫び上げた。

悪魔の宝石を投げ捨てた部屋の一角で奇怪なことが起こっていた。床に転がった金色や緑色の宝石がすうっと宙に浮くと近くに転がっていた得体の知れない大きな機械のような物にびたりと張り付いたのだ。五、六個あった宝石はその機械の頂部に吸いつきひと固まりの大きな発光体となった。金色の中に赤や緑、深い青などが混じった不可思議な輝きが打ち捨てられた機械を包んでいく。

金色の光に包まれた機械がうなりをあげた。百匹の豚が一斉に泣

きわめいたようなひどい音だ。盛りあがった背中のようにも見える所から真つ白い蒸気が吹き出す。眠りから覚めた生き物のようにそれは身をゆさぶり、動き出した。

「三流魔術師め、ぼうつと見ていないで何か手を打つことは出来ないのか」

ピールエがシャル・マールの衿首をつかみ激しくゆさぶった。

「やめろ、ピールエ、そのようにさかいをしているときではないぞ！」

王子がピールエの肩をつかみ魔術師から引き離そうとする。

機械は立ち上がった。六本の太い足の上になぐりとした芋虫のような体がついている。頭らしき物はなく、六本の足も一本ずつ太さや形が異なっていた。幾つもの円筒や四角や三角の箱状の物、大小の円盤などを組み合わせた全身をうねうねと何十本もの管がはしっている。身動きする度にそれらの部分がぎしみ合って耳障りな悲鳴のような音を立てた。

私たちは半ば恐怖に襲われた。ピールエを魔術師から引き離した。

「卿！あの機械の怪物を打ち倒す術はないのか！」

シャル・マールは王子の問いに答えようとしたが咳こんでしまいがでなかつた。

「そんな手品師の力などいらん。騎士には剣という物があるのだ」

ピールエは大声で叫びながら長剣を振りかざし、こちらに迫ってくる化け物に突っ込んでいった。

怪物はピールエの姿を認めたのか、怒ったように背中から蒸気を激しく吹き出した。

ピールエの剣が機械の前足に斬りつけた。太い柱のような金属の足から火花が散った。がきんという鈍い音がして、ピールエの長剣は根元から折れた。

背で輝く怪しの石が一瞬きらめいたかと思うと、怪物は為す術もない騎士を踏み潰した。悲鳴さえ聞こえなかつた。銀色の鎧がひしゃげ、赤い血と肉がはみ出して潰れた。フラートン王国の騎士の

誇りは壊れかけた機械の一足で消え去った。

シャル・マールがまだ咳込みながら、呪文を唱え出した。先刻、下の階で宝石の魔物を打つたのと同じ呪文のようだった。

魔術師の手の先から青白い火の玉がとんだ。だが、怪物は激しく身を揺らしながら向かってくる。火の玉はわずかのところで怪物の背中をはずれ背後の壁に当たって爆発した。

もはや機械はほんの十メートルばかりに迫っていた。私たちは敵に背を向けて逃げ出した。王子は何もいわなかつた。

怪物の足音は百人の鎧兜の騎士が足を踏みならすように塔に響き、私たちの耳を打った。吹き出す蒸気の白い幕の中に金色の光が悪魔の目玉のようにゆらめく。

逃げるといつても昇ってきた階段は怪物の背後だった。私たちは籠の中の兎のように機械の死骸が立ち並ぶ部屋の中を逃げ回るだけだった。

「シャル・マール卿、次の手はないのか！何か、強力な妖怪変化でも呼び出せないのか」

私は走りながら魔術師に聞いた。卿は荒い息をつきながら答えた。

「私はヌーヴァールのように地獄の住人とはつきあいはないのだ。自然界の穏やかな精霊が私の友だ」

怪物は行く手をふさぐ機械の残骸を蹴散らし、踏み潰し、煙を吹きながら突進してくる。ぎいぎいときしみながらもその動きは獣のようにはやい。背中の中の宝石は明滅して、金と赤と緑の光を撒き散らす。

「あそこだ！あの柱の中に逃げこむのだ」

王子が叫んだ。見ると中央の柱に大きな入り口のようなものが開いている。入ってきた側とは反対側で気づかなかつたのだ。中には階段らしきものが見えた。

王子、シャル・マール、ジェースは次々に柱の中に飛びこんだ。私はユイスの姿を求めた。

彼は柱の入り口の正面、怪物をはきんで部屋の隅にうずくまっていた。

「ユイス、起きろ、逃げるんだ」

私は怪物の足許を走った。背を丸めて頭を押えて化け物の足許をかき潜っていった。こいつに腕がないことを百の神々に感謝した。怪物はしゅうしゅういいながら、体の向きを変えた。こちらに向かってくる。

「ユイス、しつかりしろ、起きろ、ここから逃げるんだ！」

私は意識がはつきりせず、ふらふらしている男を引きずりながら、柱へと向かった。怪物の足がすぐそこに迫る。灰色と薄紫の鉄と石のような物で出来たそれは何本もの骨のような物やたくさんの管のような物が絡み合っていてきていた。

踏み下ろされた足がユイスの洋袴の裾を踏みつけた。私は一瞬動けなくなった。次の一撃が迫る、ぎりぎりといういやな音が頭に響く。

私は無理矢理ユイスの体を引っ張った。服の裾が引き裂ける。ほんの数メートルのところに怪物の足がおりてきた。床と足の間に青い火花が散る。

私たちは辛くも柱の中に転がり込んだ。

怪物はどしんどしんと柱に体当たりする。金物を擦り合わせるかん高いいやな音がする。

柱の中は円筒形の小さな部屋になっていた。階段と見えたのは部屋の壁から突き出した薄い板状の物だった。つまり逃げ場はないというわけだ。

「ウォニージュ、ルカーヴ、ルド、コティイスヒスキヴ、ルド！大気を駆け、山を巡る火の精よ、我に力を！」

シャルル・マールがもう一度火の玉の呪文を唱えた。

青白い火球が怪物の背の上で光っている生きた宝石に命中した。金と青の光が激しくぶつかりあい、目くらむ閃光が走った。朱色

と青の稲妻が化け物機械の体の上を走り回る。

怪物の背から激しく蒸気が吹き出したかと思うと、光が消えた。宝石は色をなくして黒い石炭のように見える。機械は動きを止めた。

私たちは息を潜めてしばし怪物を見続けた。

「死んだのか、こいつは」

私はシャルル・マールの顔を見た。魔道師は額に汗をにじませて、怪物の背をじつと見つめている。

「だめだ」

魔術師がそう思ったかと思うと、再び、怪物の背中の宝石は金色の光を発した。蒸気が吹き出し、金物の足が動きだす。そのとき王子が叫んだ。

「この柱は昇降機だ。そうに違いない」

「こんな馬鹿でかい昇降機があるのかい」

下階の台所から料理などを運ぶ昇降機なら私も見たことがあるが何人もの人を運ぶような物があるとは知らなかった。そういわれてみれば柱の中にあるこの部屋はそういう物のようにも思えた。

怪物はより激しく柱に体当たりをしてきた。巨体がぶつかると小さな部屋は揺れ動き壁に亀裂さえ走り出した。

王子は入り口の側の壁についていた二本の青銅製の棒状の物に飛びつき動かそうとはじめた。

「これが操作桿に違いないが……」

王子は上にあがっていた右側の方の棒を下に倒したが何も起こらなかった。

「こちらか！」

もうひとつの方を倒そうとしたが動かない。

私とジェースも手伝いなんとか棒を下に引き下した。

「殿下、これで助かるのですか」

ジェースが青い顔で尋ねる。

「わからん」

怪物の体当たりで私たちは床にひっくり返った。入り口の側の壁

の亀裂が大きくなった。怪物はこの柱を打ち倒そうと後ろに下がり助走をつけて突っ込んでくる。

「何も起こらない！」

ジェースが叫ぶ。

大きなぎいぎいという音がして、入り口の両側の壁から扉が出てきた。怪物の一撃の寸前に扉は閉まった。激しい衝撃が襲い私たちはまた床に転がった。

「この音は？何だ」

怪物の攻撃とは別の音が天井の方から聞こえてきた。低い、腹に響くような音だ。

一瞬、体が重くなったように感じた。胸の辺りがつかえるような気持ち悪さを私は感じた。

「どうなってるんだ」

ヴォナプ・アロンが答える。

「やはり、これは昇降機だ。この塔は大昔の機械の時代の遺物なのかもしれない。我々は恐らくは上の方のどこかの階に運ばれているんだ」

部屋は低い音と共に“昇り”続けた。

6

ふっと体が軽くなったかのように感じたかと思うと、低いうなりが止まり扉が左右に開いた。

私たちの前には細い廊下がのびていた。青紫の美しい敷物が敷かれ、両側の壁も天井も白っぽい木で作られており、銀製の燭台で蝋燭が静かに燃えていた。

私たちは廊下に足を踏み出した。なんの物音もしない。しかし、蝋燭が燃えているということはこの階に何者かが住まっているのだらう。

「見ろ、『ミドロローヌの石』が光っている！近くにイマーニュ姫がいるのだ」

王子が興奮した口調でいった。彼の手の上の魔法の石は蛍のように淡い緑色の光を放っていた。

魔道師はふところから機械時計を取り出した。

「いよいよですな、王子。ヌーヴァールの力が制限される時間はもうあと四分の一シテイルほどでしょう。気をつけて、素早く行動しなくてはなりません」

シャルル・マールは一応、落ち着いてそう言ったが、顔には不安の色が濃かった。これまでのところ、魔道師の術はほとんどの場で敗れ去っている。この上、ヌーヴァールが本来の力を取り戻したら一体、我々はどうなってしまうのか、あまり考えたくはなかった。

ユイスは先程の悪魔の宝石の呪縛から完全に立ち直ってはいなかった。目は焦点が定まらないようであり、青い顔でぶつぶつと魔除けの言葉を繰り返していた。だが歩くことは出来たし、置いて行くわけにはいかないもので、生き残った私たち四人はひっそりとした廊下を進んで行った。

廊下は右に曲がりちよつと行ったところで終わっていた。正面と左側にひとつずつ、扉がある。どちらもがっしりした造りの木の扉で、木や花や鳥や、そのほか様々な生き物の姿が素晴らしい技巧で浮き彫りにされた芸術品だった。

「さて、どちらの扉でしょうかね、殿下」

王子は『ミドロローヌの石』を二つの扉に近づけてみた。左側の扉に近づけたときの方が正面の扉よりも強い光を放つように見えた。

王子は無言でうなずくと左側の扉の取っ手に手をかけた。塔の主はここまで侵入者が来るとは思っていないのか、鍵はかかっていなかった。

かなり広い一室で、廊下と同じく美しい色合いの青紫の絨毯が敷かれていた。壁と天井に取り付けられた凝った造りの燭台にはたく

さんの蝋燭がともされ、部屋を明るく照らしている。右側の壁には暖炉がしつらえてあり、その上の壁には水辺で遊ぶ天女たちの絵がかかっている。絵はほかの壁にも何枚かかかっており、いずれも落ち着いた色調で幻想的な風景や情景を描いていた。

左側の壁には本棚があり、分厚い大きな本が何冊となく納まっている。部屋の中央には肘掛けのついた大きな絹張りの椅子と、大理石のはいった机が一組あった。机の上には赤い皮で装丁された一冊の本がのつていた。

扉の正面の壁には三つの大きな窓があつたがいずれも雲の刺繍のある空色の掛け幕でおおわれていた。

部屋の調度、装飾はどれをとつても美しく、全体にも調和がとれた落ち着いたものだった。繊細な感覚をもつた芸術家か学者肌の人物がここには住んでいるように思われた。

空色の掛け幕の前に同じ色の布を掛けられた大きな棺のような物が置かれていた。

王子はゆつくりとそれへ近づいていった。掌の上の魔法の石は鮮やかな緑色の光を発している。王子の肩は小刻みに震え、足取りさえ不確かなように見えた。

王子が空色の布に手をかけようとしたそのとき、静寂を破る声が出た。

「さわるな！それは宝だ。宝に違いないぞ。俺の物だ、俺の物だ！」

背後からおぞましい叫びが聞こえ、ユイスが剣を手に襲いかかってきた。鎧の腹の部分に一個の寶石が食い込んでおり、ぎらぎらする金色の光を放っている。見開いた目は真っ赤で瞳は怪しの石と同じ金色になっていた。

「こ、こ、この化け物！」

ジェイスが恨みのこもつたうなり声をあげて、ユイスを迎え撃つた。二人の剣が噛み合い、火花が散る。

「貴様のせいだ、貴様のせいだ、イスギンは死んだ、ピールエ様も

死んだのだ。この乞食傭兵め！」

ジェイスは異様に興奮した様子で、術中に落ちたユイスを斬り倒そうと剣を振り回した。私はなぜか昼間の戦いの獣人兵の姿を思い起こした。

「やめろ！ユイス、目をさませ！ジェイス、斬るな！」

私は二人の間に割つてはいるうとしたが、何者かに操られるかの様に二人は気狂い染みた勢いの戦いを続けた。ジェイスの切っ先が私の肩をかすめた。

「やめろ、二人とも！これはヌーヴァールの妖術だぞ。卿！」

目標を寸前にした王子は固い表情で叫んだ。シャルル・マールは髭をつかんで額にしわをよせている。役に立つ呪文を思い出そうとしているのだろうか。

「殿下、ジェイスを押えて！」

私は目を向いて罵詈を吐きながら剣を振り回すユイスをなんとか羽交い締めにした。王子がジェイスを後ろから押えつける。

「殿下！何とぞお手をお放しくください。この野盗めを斬らねばイスギンの霊は浮かばれません」

「ジェイス、静まれ！魔法だ、邪悪な魔法がおまえたらの心を狂わせているのだ」

ジェイスの台詞はもつともらしかったがその顔付きは異様だった。宝石は彼にはとりついてはいないはずだったが、他にも力が働いている。ヌーヴァールはすでにアー・ボーンの力を取り戻しつつあるかも知れない。

シャルル・マールが半ば震え声で新たな呪文を唱えはじめた。数珠を右手に持ち、左手の指をくねらせて何かの形を空中に描く。気弱な魔道師の額には玉の汗が浮かんでいる。

「エウーガ、アーケン、デルツチェント、ハウ、エウーガー！」

にらみあう二人の間の空中にもやもやとした薄黄色の煙とも光ともつかぬ物が現われた。それは二つにわかれるとユイスとジェイスの頭の中に吸いこまれていった。

始めにジェースの、次にユイスの目の異様な輝きが消え、二人とも体から力が抜けたようにぐったりとなった。剣の先が敷物に着く。

「ふう、今度はほんとに効き目のある魔法なんだろうね」

私の台詞に魔道師はにこりともせず、額の汗を拭った。

「わからんよ、自信はない」

その言葉は次の瞬間に実証された。王子が手の力をゆるめると、ジェースはかっと目を見開き、王子の手を振りほどいて、剣をユイスの腹に突き立てた。

私の腕の中でユイスの体がのたうち、凄まじい叫びが部屋にこだました。ざっくり切れたユイスの腹から真っ赤な血が吹き出し、青紫の絨毯を黒く染めていく。

「ジェース！」

王子の剣が銀鎧の兵士の首筋に振り下ろされた。ジェースは噴水のように血を吹きながらくるくると回って床に崩れた。

「斬ってしまった。私の兵士を斬ってしまった」

王子が血まみれの男の歯を食いしばった死に顔を見下ろしていった。

ユイスはまだ死んではいなかった。仰向けに倒れた彼の腹で、血に染まった悪魔の宝石は脈打つように光を発した。床の上で海老のようにのけぞり、奇怪な叫びをあげると男は腹から命の水を垂れ流しながら立ち上がった。

もはやそれはユイスとは言えない代物だった。階下で遭遇した機械のように宝石から出る光が全身を駆け巡り、まぶたの下からは金と赤と緑の光があふれて辺りを射していた。

ユイスだった怪物は恐ろしい勢いで剣を振り回し、私たち三人を斬り殺そうと襲いかかってきた。彼の刃は王子に向かうかと思わせてシャルル・マールに襲いかかった。

魔道師は必死の形相で長剣を避けようとしたが切っ先が肩口を斬り裂いた。悲鳴があがり、血が飛び散る。足がもつれてシャルル・

マールは床に倒れた。

ユイスだった怪人は魔道師の胸に剣を振り下ろした。呪文を唱える時間はなかった。

一足遅く私の剣がユイスだったものの首に食いこんだ。半ば切断された首が胸に垂れ下がり、勢いよく血が吹き出して、天井までどいた。怪人は倒れた。宝石はまだ鈍く光っており、ユイスの体はひくひくと動いたがもう起きあがることは出来なかった。

「卿、しつかりせよ。シャルル・マール卿、私のつたない力だけではイマーニュ姫を目覚めさせることは出来ぬかもしれない、卿、死んでくれ！」

王子はどくどくと血を流している魔道師の傍らに跪いた。

「殿下、殿下の誠の熱情さえあれば、きつと姫を邪悪の手から救い出すことは出来ます。私の言葉では余り当てにならないかもしれないが、私はもつと力が欲しかった。強い魔術師になりたかった。暗黒の住人たちにも触れてみたくて、ここに来ましたが……それは間違いだったようです。はやく、姫を……」

数珠を握りしめてシャルル・マールは息たえた。

美しく落ちて着いたたたずまいのあつた部屋の中は屠殺場のように血みどろになっていた。三つの死体が転がり、辺り一面に血が飛び散って、部屋の調度を台無しにしていた。生臭い臭いが立ち込めて、私は気分が悪くなった。

王子は三人の死体を一瞥すると手にしていた細身の長剣を床に放り投げた。そして、窓辺の棺様の物に向き直り、今は赤い飛沫を浴びて汚れてしまった空色の布を取った。

王子はなんの言葉も口にせず、その場に凍りついたように動かず、布の下から現われた人に視線を注いだ。

淡黄色の木枠に硝子をはめこんだその棺とも寝台ともつかぬ物の中に七色の花びらに埋もれて、ひとりの女性が横たわっていた。金色の巻き毛、ばら色の肌、くつきりとした眉を持った古風な美しい顔立ち、白地に薄い青と緑で夏草の模様を染めぬいた裾の長い簡素

な服を身につけている。

まぶたは閉じられ、胸が上下している様子はなかった。

「姫、イマーニュ姫……」

王子がかすれた声を出した。硝子にはりつくように棺にすがり、青白い頬を涙が流れていった。

静かに背後の扉が開いた。昼間、塔の胸壁で見た巨躯の男がはいってきた。黒い飾り気のない長衣に大きな金のメダルを胸にさげている。ヌーヴァールのいかつい髭面には思いもかけない穏やかな、情け深いともいえる表情が浮かんでいた。

王子は気配に気づき、寝台から顔を上げた。

「おまえがヌーヴァールか、私はフラーテン王国の王子ヴォナプ・アロンだ。私は天命に導かれノーム・デイーのイマーニュ姫を救出すべくこの邪悪の支配する塔へやって来た。今すぐ姫を魔法の眠りより解放するのだ」

ヌーヴァールは眉根を寄せて、悲しげな顔で言った。

「それは出来ない。私はイマーニュ姫を愛している。この世の誰よりもだ。他の誰にも渡すことは出来ない」

「おまえは邪悪な妖術を利用して姫を奪い、この塔に閉じ込めた、それだけでもおまえの行ないは地獄の底で一千年過ぎても償われないものだろう」

王子の声はうわずり、涙声だった。

「王子よ、おまえのいうことは正しいともいえる。私は若くして、魔道の大家となり、暗黒界の魔神どもの力をこの身に付けた。だが、私は愚かだった。イマーニュ姫を見染めたのは全くの偶然、あの舞踏会の席上でだったが、私は自分の焦がれる気持ちを彼女に伝える術を知らなかった。その結果が今、目にしているものだ」

ヌーヴァールは棺に目をやり額に垂れかかる髪をかきあげた。

「私は数度の失敗と屈辱を重ねた。ノーム・デイーの宮廷には恋の手練手管に長けた香水の匂いをふんぷんとさせた男どもが腐るほどいた。私は度々敗北を味わい、あざけりを受けた。イオロップ最大

の魔道師といわれた私が、たったひとりの女性の愛を勝ち得ず、まぐわいだけしか頭にならないような腐れ貴族どもに嘲笑されたのだ。

「私の姫に対する気持ちはいつしか歪つなものを含むようになっていった。私は姫をさらった。姫がある貴族の息子と婚礼の儀式を行なう前夜に。私は姫がその野卑な男と結ばれるのを望んでいないことを知っていた。私は自分の居城であるこの塔に姫を連れてきて、ほとぼしるような心を吐露した。

「だが、答えは否だった。私は拒絶された。私はどうしていいかわからなかった。時が問題の解決をはかってくれと考えると考えた。私は姫に眠りの魔術をかけた」

王子は剣を魔道師の胸に突きつけた。涙に濡れた目は赤く、水色の瞳が強い光をはなっている。

「姫はいつ目覚めるのだ！」

「もうすぐだ。十年に一度姫は目覚める。今日はその日なのだ。私は十九回、姫が目覚める度に求愛してきた。そして十九回の失意を味わった。二百年は私にとつても短い月日とはいえなかった」

ヌーヴァールは王子の剣を手で横に払うと、棺の側に歩み寄った。優しい手つきで寝台の上部の硝子をなでて、二言三言、秘密めいた言葉をつぶやいた。

寝台の蓋が左右に別れてひとりでに開いた。かすかな青白い霞のようなものが中から吹き出し、幾つもの花の香りが漂う。

「姫よ、我が愛しのイマーニュ姫よ、目覚めの時が来ましたぞ」

ヌーヴァールが寝台に身をかがめ、ささやいた。その声は先程までの太く力に満ちた声とは別人のような、高く、透んだ声に聞こえた。

眠りの姫はゆっくりと目を開いた。失われた森の奥の湖水のような緑色の瞳がのぞいた。ヌーヴァールはイマーニュ姫に手を差しのべようとした。

王子の剣が閃いた。銀色に光る刃が塔の魔道師の背中に深々と突き刺さった。胸のメダルを跳ね除けて、胸から切っ先が突き出す。

だが、それには赤い血はついてはいなかった。

王子は両の手をわなわなと震わせ、柄から手を離し、後退った。顔には恐怖と当惑の色が浮かんでいた。

ヌーヴァールは剣を突き刺したまま、王子の方に振り向いた。血こそ出ていなかったが、顔は灰色だった。

「私はやはり愚かな夢見る人間だった。二世紀の孤独の年月は何ももたらしはしなかった。王子よ、おまえは私の同胞だ。私にはわかっていて。おまえの孤独は永遠にいやされることはなく、おまえの夢想はとこしえに満たされることはない」

魔道師は一步一步王子の方へ進んでいった。ヴォナプ・アロンは魔道師の瞳に魅入られたように水色の瞳を見開き、立ち尽くしている。

「フラートンの王子ヴォナプ・アロンよ、おまえは私の兄弟だ。私たちにはいるべき場所がこの世界には用意されていないのだ。共に新たな見えざる道を歩もうではないか」

ヌーヴァールはゆっくりと王子に近づき、胸から突き出した剣は王子の胸に届こうとしていた。

私は一瞬、戸惑いを感じた。私はこのまま傍観者でいるべきなのではないかという思いが頭をよぎった。

だが、心に染み着いた凡庸な常識が私を動かした。

死の抱擁が交される寸前、私の剣が魔道師をけさがけに斬り裂いた。金のメダルを下げていた細い金の鎖が切れた。ヌーヴァールは青紫の絨毯に崩折れ、メダルが転がった。突然のように魔道師の傷口から真っ赤な血が吹き出した。

塔の支配者はどす黒い血の川を引きずりながら、イマーニュ姫の寝台の方へ這いずっていった。台の縁に手をかけ、血まみれの体を引きずり起こす。

魔法の眠りから目覚めた女はまだ夢の世界をさ迷っているようで、血まみれの男の顔を目にしても、空ろな緑の瞳は表情を示さなかった。

「イマーニュ……」

ヌーヴァールは二百年愛し続けた女の名を呼ぶと、力尽きて、倒れた。

魔道師の亡骸には不可思議なことが起こった。八イートはあるかと見えた体が見る見るうちに縮んでいき、むしろ小柄といえるほっそりとした姿になった。髭に包まれたいかつい顔も蛾細工のように変わっていき、繊細な美しさをもった少年の顔が現われた。その顔は驚くばかりに、ヴォナプ・アロンの顔と似ていた。

王子は眼前で起きたことをよく把握できないように、困惑した顔で、魔道師の美しい死に顔を見つめていた。王子は二百年も生きているわけではなかった。

イマーニュ姫が寝台から身を起こした。その艶やかな赤い唇を最初について出たのは恐怖の悲鳴だった。

「姫、姫、御安心を。姫に仇なす魔道師はこの通り、すでに永久の眠りについております。私はフラートン王国の王子ヴォナプ・アロン、あなたを救うためにやって来たのです。そこにいるのは私の兵士、海の彼方から来たスナプ・ランケン。姫はもう心配することは何もありません」

悲鳴はやんだが、イマーニュ姫は美しい顔を曇らせて、部屋の惨状と、私たちを代わる代わる見た。

「わからないわ。何が起こっているの。あなたのいう王国の名は聞いたこともない。あなた方はノーラ・パナツヴの手の者？」

「姫、驚くべきことではありますが、姫はこの塔で二百年の年月を過ごされました。ヌーヴァールの魔法が姫を長き眠りに落としていたのです」

「二百年？ヌーヴァールは毎日、私に愛の言葉をささやき続けていました。記憶がはつきりとしませんが、ここに連れて来られてまだひと月とたつてはいないはずですよ」

「一夜の眠りが十年だったのです。悲しいことですが、今はノーラム・デイーの国すら伝説の霧の彼方に消えようとしています。しか

し、姫には私がおります。姫のしあわせはこの私が命を賭けて……」

イマーニュ姫は白い指で金色の髪を押え、うつ向いた。

「では、まことに二百年が、過ぎ去ったというのですか。私の国は、父上や母上、兄上たちは遙かな昔に土に帰している」と

「御心は察します」

「では、私の愛する人も、ノーム・ディー一の狩人ノザインも森の朽ち葉の下に眠っているというのですか」

王子は、何も言えなかった。彼も、もちろん私もそんな言葉を聞くとは思ってもいなかった。

イマーニュ姫は寝台からおりと、窓に掛かった空色の掛け幕をめくった。硝子のはいつた窓の向こうには夜明けの鈍色の空が広がっていた。

「おお、なんとということ、この空の下にはもうあの人はいない。父上を裏切り、お城を抜け出しても添い逐げるはずだったノザインが二世紀も昔の誰も知らない人になっていいるなんて……」

姫は窓の掛け金はずした。大きく窓枠から身を乗り出した。

「姫！」

私は駆け寄ろうとしたが寝台の縁にしたたか足をぶつけて倒れた。

王子の手はイマーニュ姫の腰帯の端をつかんだが、それは半ばでちぎれた。

姫の体は曙光のさす中を、三百イート下の荒れ地へ向かって落ちていった。

淡い青と緑の服がはためいたかと思うと姫の姿は真珠色の霧と化し、空中に散った。

王子の手に握りしめられた帯も、白い灰のようにさらさらと崩れて、夜明けの空に消えていった。

私たちは無言で昇降機に戻り、操作桿を起こした。昇降機は機械の怪物の階には止まらず、天井の高い大広間のようなところで扉が開いた。大きな扉があり隙間から朝日がもれていた。

私たちは塔の正門から外に出た。銀と黒の鎧姿の死体が並ぶ中を歩いて行った。獣人兵たちの死骸は見あたらず、代わりに何百匹もの単と猿の死骸が転がっていた。

私たちは押し黙ったまま、パアリシユの街を出た。最後の奇怪な灰色と赤茶色の固まりのところで私たちは別れた。

その後、ヴォナプ・アロンがどうい道を通ったのか私は知らない。私の胸にはまた新たな憂鬱が宿ったようだった。

朝日はすぐに灰色の薄い雲におおわれて、黄色味がかったひ弱な光がイオロープの荒野を照らした。

不毛の恋物語は終わった。

私はひどく、暖かい女の肌が恋しかったが、次の街はまだ遠かった。